

21. それから、一行はカペナウムにはいった。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂にはいって教えられた。
22. 人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。
23. すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。
24. 「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」
25. イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け。」と言われた。
26. すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
27. 人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」
28. こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。

説教

荒野で悪魔との対決を終えたイエスさまは、ガリラヤ湖で弟子たちを次々と召して後、カペナウムに入ります。

その日は土曜日で安息日でした。それで会堂に行きます。「会堂(シナゴグ)」とは人々の「集まり」のことで、イエスさまの時代のユダヤ人は毎週土曜日に神を礼拝しに集まりました。その集まりにイエスさまも出席なさいます。そして、そこで聖書を朗読します(1:21)。ルカの福音書を参考にすると、その際イザヤ書が手渡されたので、61章にある救い主到来の預言を朗読します。そこにはこうありました。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」(ルカ 4:18-19)

朗読が終わると、会堂にいる人々全員目が一斉にイエスさまに注がれます。するとイエスさまは、「今日、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました」と宣言し、その預言を説き明かされました(20-21)。これを聞いた人々は驚きます。それは、イエスさまが「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたから」です(マルコ 1:22)。律法学者は聖書を研究している専門家ですが、イエスさまの教えは彼らの教えとは違いました。どこが違ったのでしょうか。それはイエスさまが「権威ある者のように教えられた」点です。「権威」と言えばその人以上によく知っている人はいないということになります。「物理学の権威」と言えば「物理」について世界で最もよく知っている人ということになるし、「癌の権威」と言えば世界で最もよく「癌」を知っている人ということになるでしょう。「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように」と言われますが、そもそも律法学者とて「権威者」なのです。つまり、世界で最も聖書を学んで、誰よりも聖書を知っている人です。それなのに、イエスさまは「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられた」と言われます。世界一聖書を知り尽くしている律法学者にまさる権威、それは人間の権威ならぬ神の権威です。律法学者は、聖書のことばについて「聖書学者の誰々はこの箇所をこう解釈している」といくつかの解釈の可能性を示し、その上で自分の見解はこうだ、という具合に最善の結論を述べました。それは学問的な態度で、絶対者ではない人間が自分の限界をわきまえつつ、相対的に、より良い結論を見出そうとする方法です。でも、イエスさまの話はこれとは次元が違いました。イエスさまは「わたしはおまえたちに言う」と、一方的に宣言なさるので。旧約の時代、「神である主はこう仰せられる」と言われると、それは神が直接人間に語ったことばとして絶対的な重みがありました。ひとたびそう

言われると、そのみことばに従うかそれとも逆らうか、二つに一つの選択以外ありません。ちょうどそのように、イエスさまは「わたしはおまえたちに言う」と宣言して教えます。それは人の権威を超えた神としての権威で語ることを意味します。

この時に朗読されたイザヤ書の預言で言うと、それは代々「救い主」到来の預言として読まれてきた箇所、ここを読むたびに、人々は救い主が来て救ってくださるといふ希望を新たにしておりました。「貧しい者に福音を伝え、捕らわれ人には赦しを、虐げられている人々を自由にしてくれる」救い主とは一体どんな方なのかと、期待に胸をふくらませていたことでしょう。イエスさまがこの預言を朗読した時もまた、人々はそれを聴きながら同じように思っていたと想像できます。朗読が終わり、通常なら「律法学者誰々はこの預言をこう解釈しています」といった他人事のような解説が、涼しげになされるはずでした。ところが、イエスさまはこう言われたのです。「今日、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」つまり、「人々がこれまで待ち望んできた人類の救い主、それはわたしである、わたしこそイザヤがその到来を預言した救い主である」と宣言なさったこととなります。これは天地がひっくり返るほどの衝撃だったと思います。そのことばが本当なら、自分たちの目の前に、日夜待ち望んできた待望の救い主が現れたことになるからです。

それで22節にある通り、「人々はその教えに驚いた」のでした。イエスさまは「律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教え」ます。律法学者たちは神について解き明かしましたが、イエスさまはその神ご自身です。かつて、アブラハムに語りかけ、モーセに語った、イスラエルの神ご自身なのです。その神が、今、預言された通りに、この地上に降り立ち、イスラエルの、ガリラヤ湖にあるカペナウムという田舎の会堂に来て、人々に姿を現し、しかもご自身が書き記された聖書を直々に読み上げ、さらにはその解説までなさったのですから、それはまさに歴史的な瞬間でした。

イザヤは「神は来て、あなたがたを救われる」と預言しましたが、遂にその日が来たのです（イザヤ35:4）。カペナウムの会堂では、毎週土曜日の安息日ごとに、人々は集まって神に礼拝を捧げてきましたが、彼らがあがめ、ほめたたえ、礼拝してきた、その見えざる神ご自身が、見える姿でその礼拝の中に現れたのです。イエスさまこそ、彼らの礼拝の中心にして本質そのものでした。彼らの真ん中であって、彼らを教え、彼らにあがめられるべき方です。イエスさまは、安息日の主であり、礼拝の主人公、聖なる神の民の「集まり」の主人、そして天地宇宙の主、全世界の主であられます。

人々が、自分たちの理解を超えた権威に驚いている時、最も敏感に事態を察知したのは「汚れた霊」どもでした。彼らは、イエスさまの教えを聞いて耐えきれず、「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」と取り憑いている人に叫ばせます（マルコ1:24）。「汚れた霊」とは、別名「悪霊」で、彼らの親玉は「悪魔（サタン）」です。悪魔とその手下である悪霊は、世の終わりの審判の時には一匹残らず地獄に投げ入れられることが決まっているのですが、それまでの、いわば永遠の死刑執行までの猶予期間、一人でも多くの者を道連れにしようと最後の悪あがきをしています。その働きの本質は、神が見えないよう人間を惑わすことです。天と地の中間にある「空中」で、神と人との交わりを妨害します。その意味で、悪魔は暗闇の支配者、暗黒大魔王です。そして、悪魔の手下である「汚れた霊」どもは、地上に於ける神の民の「交わり」の中にも潜入していました。そうして、取り憑いた人間の汚れた言動を通して、神と人との交わりを妨害し、人々に神を見えなくさせていたに違いありません。

でも、そこに彼らを滅ぼす永遠の主権者イエスさまが現れます。そして、人の言葉ではなく神のことばを語ります。それは悪霊どもにとってはこれ以上ない大きな恐怖の瞬間で、パニックとなります。神のことばがまっすぐ正しく語られる時、悪魔は戦慄します。人々に真実を知られては困るからです。それで、魔界の総力を挙げてこれを妨害します。神の権威ある教えをなきものにしようと挑みかかります。この時もそうでした。

「ナザレの人イエス！」と最初に呼ぶのは、相手の正体を見破ることで相手を制圧し、その威力を封じ込めるためです。名探偵の明智小五郎が「お前は怪人二十面相だろ！」と正体を見破るようなものです。それで、悪霊は「正体はわかっている、神の聖者だ！」と言います。「お前は何をしに来たのか、俺たちを滅ぼしに来たんだろ！」とは全くその通りで、世に蔓延り我が物顔で世界を牛耳っている悪魔の支配を打ち破り、悪魔の虜となっているご自身の民を解放し、神が造られたこの世界を回復させるためにイエスさまは世に来られました。悪霊にとってはこれ以上ない恐怖ですが、悪霊に取り憑かれた

人は救われました。イエスさまは彼を助けました。挑みかかる悪霊には、イエスさまはこれを叱りつけて「黙れ。この人から出て行け」と命じます(25)。すると、「汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った」のでした(26)。これを見て、人々はみな驚き、互いに顔を見合せて言います。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」(27)

イエスさまは悪霊より強い方です。それどころか、悪霊どもの親玉、悪魔・サタンより強い方です。イエスさまは最後の審判者、唯一のさばき主です。「汚れた霊をさえ戒められる、すると従う」のです。そして、イエスさまは、悪魔の支配を打ち破るためにこの世に来られました。イエスさまが世に来られた時、悪霊界は恐怖におおのきパニックになりましたが、もともと世界は神が造りました。つまり、神のものなのです。それを悪魔が我が物顔に牛耳っておりました。人々の目を眩まして神を見えなくさせました。すなわち、神の愛を知らせず、その結果、神と人を愛さなくさせていたのです。そこへイエスさまが来られます。神である方が人となって世に来られました。そして、イエスさまが世に来た時、悪魔の支配が打ち破られます。イエスさまは「貧しい人々に福音を伝え」、「囚われ人を救し」、「盲人の目を開き」、「しいたげられている人々を自由にし」て、要するに神の愛を人々に知らせました。人は神に愛されている、この真実を知らせたのです。それはまさに「権威ある、新しい教え」でした。

こうして、イエスさまは悪魔の支配を打ち破って真実を知らせます。天と地の真ん中にある「空中」を飛び越えて、神ご自身が天からこの地上に降りてきました。私たちと同じ人間となり、私たちの所に来て、私たちの住む町、それも田舎の町、そこで忠実に地道に礼拝している「集まり」の真ん中に来て、人は神に愛されている、人は神に見捨てられていない、悪霊に憑かれた人であっても、元々は彼も神に愛され神に造られたかけがえのない人間なのだという真実を、イエスさまは彼を救うことで知らせたのです。